

初等教育における アクティブ・ラーニングの実践

～21 世紀型の学力を身に付けていく子供の育成～

北海道教育大学附属函館小学校研究局

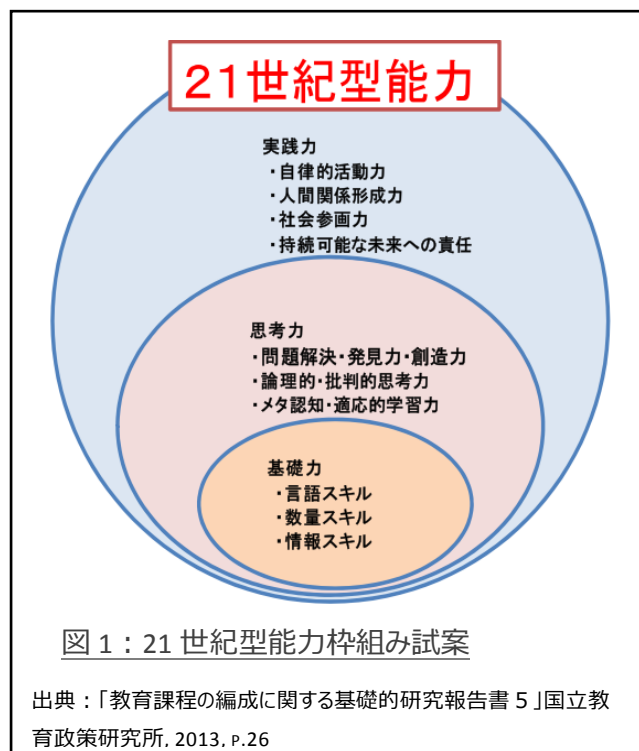
溝口 仁志 冬野 恒史 藤山 雄次 阿部 智 神野藤 均 伊藤 光

1 求められる 21 世紀型の学力

21 世紀の社会は情報技術の進化がさらに加速を続け、国境を越えた知識の共有、蓄積、吟味が可能となり、知識の構築や、刷新速度もさらに速まっていくことが予想されます。このような変化の激しい社会においては、単に知識を暗記してそれを再生するだけでなく、論理的に考えたり他者にわかりやすく表現したりする実社会で活用できる能力である、汎用的な能力の育成が求められています。

社会変化のスピードが著しい 21 世紀に入り、国内外ともに、育成すべき資質・能力を明確化した上で、その育成に必要な教育の在り方は同じ方向性をもって考えられています。「キーコンピテンシー（OECD）」「21 世紀型スキル（The Assessment and Teaching of 21st-century Skills）」「人間力（内閣府）」「社会人基礎力（経済産業省）」など様々な組織においてこれらの資質・能力にかかわる提言がなされています。

国立教育政策研究所の平成 24 年度の報告書において「21 世紀型能力の枠組み試案」は図 1 のように「思考力（例：問題解決・発見力・創造力、論理的・批判的思考力、メタ認知・適応的学習力）」を中核として、それを支える「基礎力



(言語スキル、数量スキル、情報スキル)」、その使い方を方向付ける「実践力（自立的活動力、人間関係形成力、社会参画力、持続可能な未来への責任）」という三層構造で示されています。

これら育成すべき資質・能力に関わる提言では 21 世紀に求められる学力が「何を学んだか」「何を知っているか」という知識中心の学力だけではなく、「どのように学んだか」「何ができるか」といった実社会で活用できる資質・能力の育成が共通して問われています。そこで、私たちは今の学習指導要領における各教科等の目標を達成するとともに、21 世紀型の学力につながる汎用的な能力の育成を目指し、アクティブ・ラーニングという学び方に注目しました。

2 21 世紀型の学力を育成する初等教育におけるアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは、非常に包括的な概念であり、高等教育の場において「学生参加型授業」「協同／協同学習」「課題解決／探究学習」「能動的学習」「PBL (problem/project Based Learning) など、扱う力点の違いによって様々な呼ばれ方をしています。

本校ではアクティブ・ラーニングを柱である「課題解決型の学び」を「自主的・主体的な学び」と「協同的な学び」が支える構造とした授業において「子供が自分自身の思考において活動する能動的な学び」の実践を進めています。また、本校のアクティブ・ラーニングでは子供が「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」の変化にともなったといった、学びのプロセスを大切にしています。

実社会で活用できる汎用的な能力は教師による学習内容の一方的・一斉的伝達型授業では身に付きません。汎用的な能力は子供が主体となり知識や技能を活用し、思考・判断・表現をしながら課題解決を図る中で育まれていくと考えています。したがって「課題解決型の学び」を柱としながら、「自主的・主体的な学び」と「協同的な学び」がかかわり合いながらバランスよく構成されたアクティブ・ラーニングを繰り返す学習体験によって、子供たちは自ら課題を見つけ、自主的・主体的に協同的に解決していくプロセスを理解できるようになり、21 世紀型の学力につながる汎用的な能力を身に付けていくと考え研究を進めてきました。



3 初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力

私たちが研究当初にアクティブ・ラーニングによって育んでいきたいと願った資質・能力と実際にアクティブ・ラーニングを通して発揮され、育まれていく資質・能力を「自主的・主体的な課題解決に関わる資質・能力」と「協

同的な課題解決に関わる資質・能力」の2点から抽出し「初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力」（試案）としてまとめました。

さらに「初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力」（試案）を、課題解決の過程である「開始期・展開期・まとめ期」に基づいて分類・整理しました。開始期・展開期・まとめ期は課題解決を通して目標を達成するという時間軸の中で、単一時間レベルでの課題解決の過程だけでなく、単元レベルの課題解決の過程においても存在すると考えています。

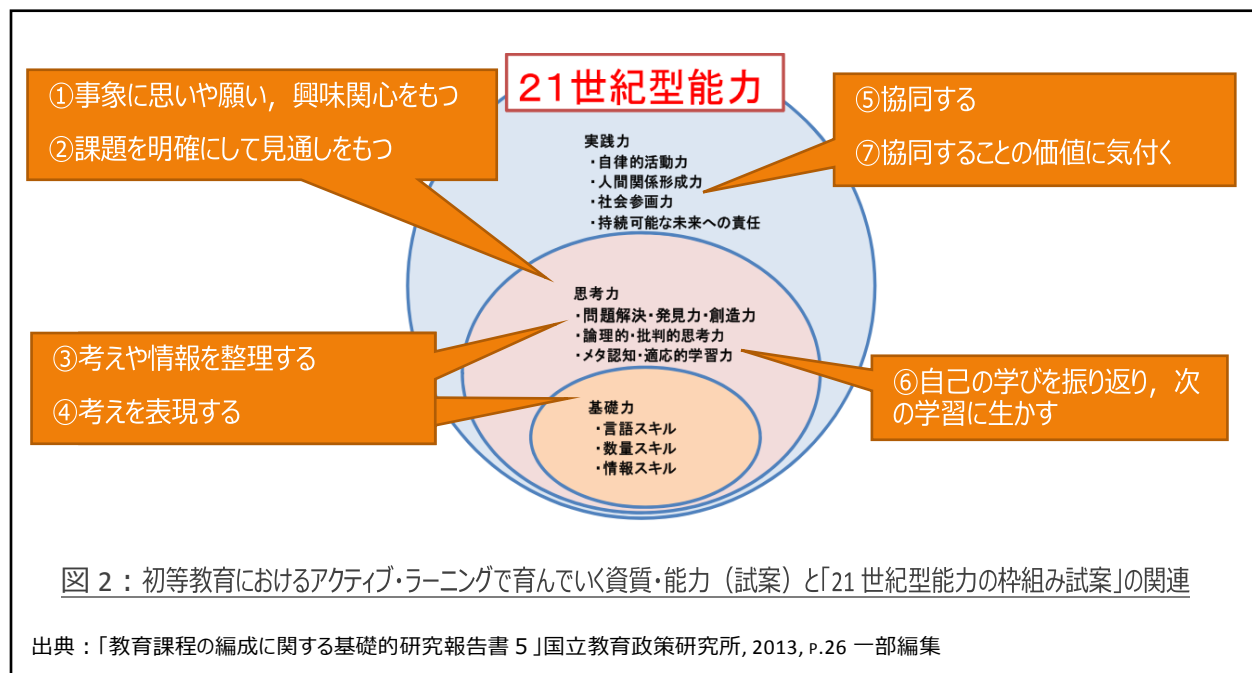


以下、本校の実践に基づいた初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力（試案）（表1）と前述した平成24年度国立教育政策研究所の報告書の内容を関連付けて表1を説明します。その関連を図2に示しました。

表1：初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力（試案）

	自主的・主体的な課題解決に関わる資質・能力	協同的な課題解決に関わる資質・能力	
開始期	<p>①事象に思いや願い、興味・関心をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい発見や驚きに喜びを感じる ・事象に思いや願い、興味・関心をもって学ぶ ・学習に必要性や必然性を感じる ・自分の力で学習を進める 	<p>②課題を明確にして、解決の見通しをもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供自身が課題を見出す ・目標や課題意識をもち活動する ・常に課題に向き合う ・課題を再考する ・よりよい課題解決の方法を考える ・課題解決の方法や手順を考え、見通しをもつ 	
展開期	<p>③考えや情報を整理する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要な情報を比較・関連・総合する ・事象を比べたり、関係付けたりする ・情報を整理・分析する ・自分の考えを形成・深化させる ・自分の考えを再構成する ・新たな考えを生み出す ・気付きが豊かになる ・試行錯誤する ・自分で判断したり、選択したりする ・より妥当性の高いものを目指す 	<p>④考えを表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを他者に伝えようとする ・より多くの考えを表出する ・根拠を明らかにして、目的に応じて適切に表現する ・自分なりの方法で対象にかかわろうとする 	<p>⑤協同する（相互補完型）（練り合い型）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的にコミュニケーションを図る ・他者と適切にかかわる ・他者の考えを聞こうとする ・他者との考えを比較する ・他者との考え方や感じ方の違いに気付く ・他者の考えを受け入れながら活動する ・学習の成果を互いに補完し合う ・学習の中で生まれた知識や考えを共有する ・他者と協同して課題を解決する ・考えを伝え合うことで、互いの考えを深める ・課題解決に向けて話し合う
まとめ期	<p>⑥自分の学習を振り返り、次の学習に生かす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返り、自分の言葉で学習をまとめる。 ・学習を振り返り、次の課題や見通しを見出し、次の学習に生かそうとする。 ・学習の価値を実感し、学習への意欲や期待感を高める ・対象への気付きを自覚化する ・自己の成長を実感する 		<p>⑦協同することの価値に気付く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者と学習することに喜びを感じる ・集団で学習した方が効率的に学習できることを実感する ・集団への所属感を高める ・互恵的な学習を自覚化する ・他者の学習の役に立ったという喜びから自己有用感を高める ・表現することの喜びを実感することができる。 ・相手意識もつ ・相手を尊重する

開始期における自主的・主体的な課題解決に関わる資質・能力の「①事象に思いや願い，興味・関心をもつ」と「②課題を明確にして，見通しをもつ」は，「21世紀型能力の枠組み試案」（図1）での「問題解決・発見力」との関連が見出せそうです。同様に，展開期における自主的・主体的な課題解決に関わる資質・能力の「③考えや情報を整理する」と「④考えを表現する」は「創造力、論理的・批判的思考力」や「基礎力（言語スキル、数量スキル、情報スキル）」と通じます。また，まとめ期における自主的・主体的な課題解決に関わる資質・能力の「⑥自己の学びを振り返り，次の学習に生かす」は「メタ認知・適応的学習力」と，展開期（開始期）・まとめ期における協同的な課題解決に関わる資質・能力の「⑤協同する」「⑦協同することの価値に気付く」は「自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力」に通じると考えています。



以上から，私たちが育もうとしている「初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力」（試案）は，21世紀型の学力につながる汎用的な能力であると考えました。

この資質・能力は汎用的な特性をもつため，各教科等において横断的に継続的に育む授業設計ができると考えています。各教科においては，各教科目標を達成するとともに，これらの資質・能力が育まれます。そして，これら各教科で育まれた資質・能力は総合的な学習の時間や児童による行事運営（本校では桐の子スポーツ祭や桐の子発表会など）において①から⑦の能力がその状況に応じて生かされています。

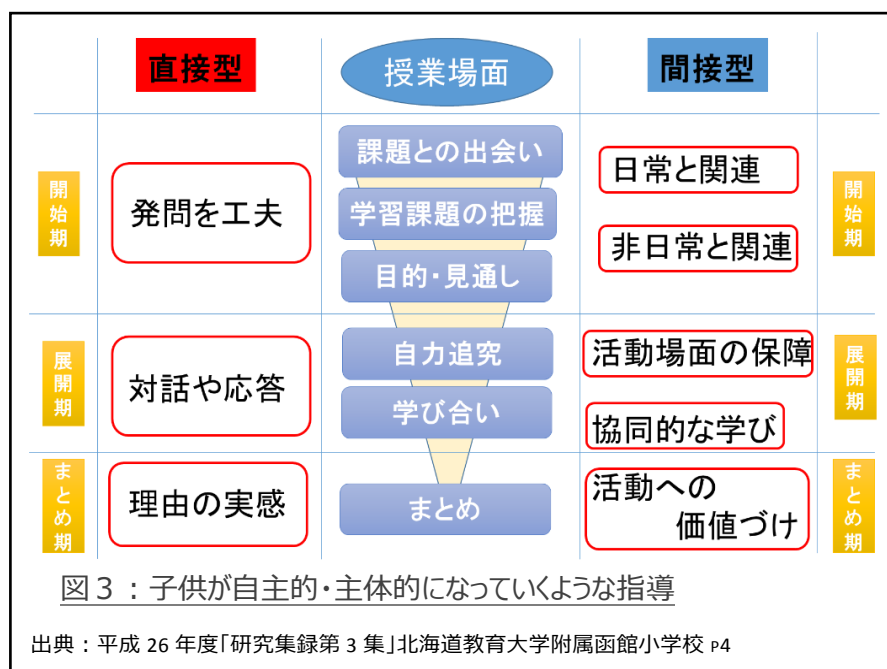
私たちは明らかになってきた「初等教育におけるアクティブ・ラーニングで育んでいく資質・能力」（試案）を各教科，道徳そして総合的な学習の時間の授業実践の中，そして行事等の運営などの実践の中で意図的に育んでいけるよう，各単元において育んでいく資質・能力を明確にし，指導案上に位置づけ，授業構想の指針とし実践を進めています。

4 これまでの研究から

3年次計画の1年次研究では、初等教育におけるアクティブ・ラーニングの構成要素を「自主的・主体的な学びの展開」「協同的な学びの展開」「課題解決型の学びの展開」と押さえ、これらが単独で存在するのではなくかかわり合いながら互いにバランスよく構成されていると考え、主に「協同的な学び」を重視した授業実践を重ねてきました。その結果、次の内容が明らかになってきました。

一人では獲得のできなかった知識や技能の獲得と定着の目標には学習成果を互いに補完し合う、相互補完型の協同的な学びが有効であることがわかりました。また、思考力・判断力・表現力等を育てていくような目標においては、互いの思考・判断・表現をかかわり合わせながら自分の考えを形成・深化させていく、練り合い型の協同的な学びの有用性を見出しました。

さらに2年次研究では「自主的・主体的な学び」にかかわって、動機づけを高める支援について研究を進めてきました。動機づけを高める支援を教師が子供に向けて直接的に発信するような働きかけであり、柔軟ですばやい反応が可能である直接型の支援と、環境構成に向けた働きかけであり、時間的・空間的な調整をしていく間接型の支援に大別しました。また、直



接型の支援と間接型の支援を課題解決の過程である「開始期・展開期・まとめ期」のどの場面で行うかを構造化し、検証していきました（図3）。その結果、以下の4つの観点が知見として得られました。（表2）

表2：「自主的・主体的な学び」に関わって明確にすることができた動機づけを高めるための観点

- ① 支援のポイントを授業のねらいと整合させる
- ② 授業内で支援のネットワーク化を図る
- ③ 協同的な学びの展開
- ④ まとめ期における自己有用感の醸成

出典：平成26年度「研究集録第3集」北海道教育大学附属函館小学校

これらの知見を生かした授業により、子供が自主的・主体的に学ぶ姿が多く見られました。

5 今年度の研究

これまでの研究から、私たちは支援のネットワーク化とまとめ期における自己有用感の醸成により、より自主的・主体的な課題解決が図られていく点に着目しました。支援のネットワーク化とは、それぞれの支援が単独にあるのではなく、支援の関連付けにより、より効果的な支援を意図したものです。

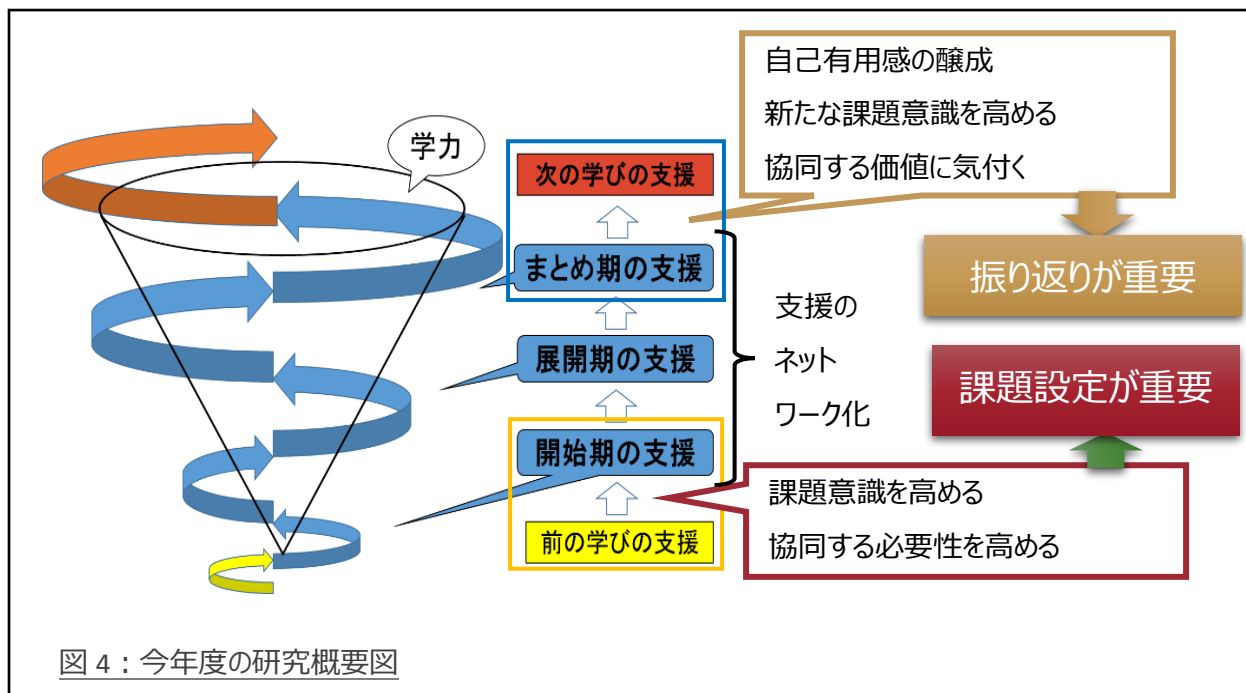
例えば、開始期において、子供の考えを焦点化し、課題意識を高め、より深く考えていけるように「発問を工夫」した支援を行いました。そして、展開期では開始期でもった考えをさらに多面的・多角的にとらえることができるよう、「協同的な学び」を取り入れた学習過程や、視点を転換していくような「対話や応答」による支援を行いました。さらに、まとめ期においては、教師が子供たちの「活動への価値づけ」支援を行い、自己有用感の醸成を図りました。

このようにネットワークされた支援とまとめ期における自己有用感の醸成により、子供たちは課題を明確にして解決を図り、自己有用感と新たな課題意識を高め、次の学習にも能動的に取り組んでいきました。この例から、アクティブ・ラーニングでは課題意識を高める手立てとまとめ期における自己有用感を高める手立てにより、次の学びへの学習意欲を高め、学びの連続性を生み、自主的・主体的な課題解決を促進していくと考えました。

加えて、私たちは協同的な学びの展開により、子供が学習への動機づけを高め、自主的・主体的に学ぶ点にも着目しました。協同的な学びは従来から行われてきたペアやグループといよる学習形態による学習をさらに次の点で発展させていく必要があると考えます。まず、「友達の考えを聞きたい」「自分の考えに対する友達の意見が聞きたい」「一緒に考えたい」「自分の力だけでは解決できない」など子供による協同的に学ぶ目的の理解と、その必要性の高まりが不可欠です。そのためには、協同的に学ぶ必要性のある学習活動とその活動を導く学習課題が重要です。さらに、子供が協同的に学ぶ経験をくり返し、その価値を自覚することで、協同的な学びの必要性を子供自身が高め、次の学びでも協同的な課題解決を図っていくのです。



これらのことから、課題意識と協同的な学びの必要性を高める「課題設定」の在り方と、自己有用感や新たな課題意識の高まり、そして協同的な学びの価値に気付く「振り返り」の在り方の重要性が明らかになってきました。そこで、「課題設定」と「振り返り」の在り方を今年度の研究の視点とし、子供が自主的・主体的な課



題解決および協同的な課題解決を図り、課題解決型の学びを体験できる授業により、21世紀型の学力の育成を目指し実践を重ねることにしました。

5- (1) アクティブ・ラーニングにおける課題設定の在り方

本研究における「課題設定」とは、ひとつひとつの課題自体を工夫する手立てだけでなく、学習過程の中で課題意識を高める手立てなども含まれていると押さえます。

例えば、社会の学習で写真や資料から、子供の気付きや疑問を引き出し、調べてみたいという思いをもたせる単元全体を見通した、学習過程の開始期における動機づけなども課題設定の在り方といえます。そこで私たちは今までの実践から、アクティブ・ラーニングにおける課題設定に着目しました。いくつかの事例を示します。

2年算数の「計算のくふう」では、加法の結合・交換法則のよさの気が付くことができるよう、子供の生活経験に基づく場面を設定し、「代金を簡単に計算する作戦を見付け、見付けた作戦を使ってお店屋さんを開こう」という課題設定をしました。子供は生活経験に基づく場面設定により、計算を工夫することの必要性を感



しながら、自分の考えた簡単に計算する作戦を、友達に伝え合い、友達の考えと自分の考えを比較し、共通点と相違点に着目しながら、理解を深めていく姿を見ることができました。

4年国語の「ごんぎつね」の実践では「兵十になりきってその後のごんぎつねを書こう」という単元を貫く言語活動を設定し、学習を展開しました。その単元では「最終場面をごんの視点で書き換えて二人の関係を考えよう～『ごんはぐったりとめをつぶったままうなずきました。』の文をどう書き換えればいいのか」という課題を設定しました。この課題により、子供は文を書き換えるというゴールイメージを明確にもち、学びを進めていました。書き換えた文とその根拠である自分の考えを友達の考えと比較しながら、自分の読みを深めている様子が見

られました。4年総合的な学習の時間「函館のPR隊」では、函館についてのイメージを話し合った後に「住みたいみたい街ランキング」を予想する活動を設定しました。子供たちの予想は函館のランキングはそんなに高くないと予想していました。しかし、実際のランキングを発表すると、子供たちの予想とは反対に上位にランキングされている事実を知



ります。子供たちはこの結果から、「自分たちの知らない函館の魅力がある。函館の魅力についてもっと調べたい」と事象に興味・関心をもち、子供自身が課題を見出しながら学んでいくことができました。

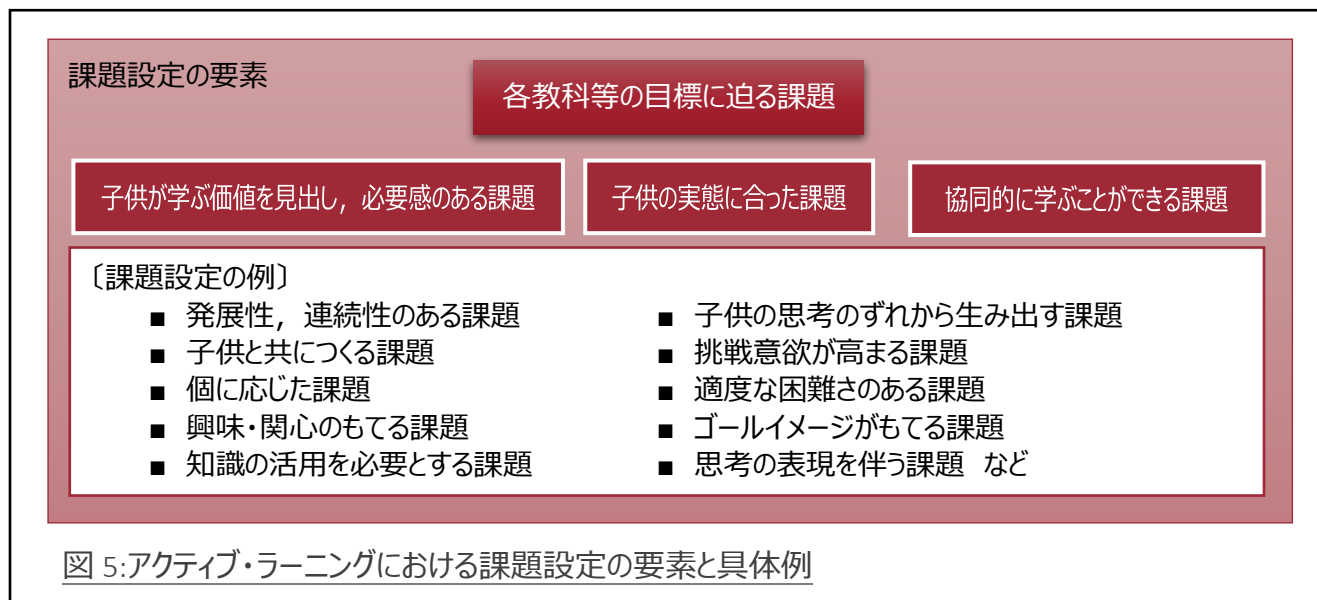
今までの実践から見出した課題設定の工夫を抽出し、次に説明するアクティブ・ラーニングにおける三つの課題設定の要素として整理しました。課題設定の在り方として、各教科等の目標を踏まえ各教科等の目標に迫る課題設定が必要です。体育科であれば、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」という目標に迫る課題解決が目指されているかということです。

次に重要な要素として、「子供が学ぶ価値を見出し、必要感のある課題」「子供の実態に合った課題」「協同的に学ぶことができる課題」の3点が上げられます。「子供が学ぶ価値を見出し、必要感のある課題」については、教師から一方的に課題提示されるのではなく、子供の事象からの気付きや、教師との対話により課題意識が高まっていくような課題設定の仕方としてとらえています。また、「子供の実態に合った課題」については、子供の発達段階や学習準備状況（レディネス）を考慮した課題設定といえます。子供の実態を十分に把握した上で、課題の興味・関心を高めたり、挑戦意欲がもてたりするような課題設定としてとらえてい



ます。「協同的に学ぶことができる課題」は、子供同士の相互作用が生まれるような学習課題としてとらえています。自分の考えを友達に説明したり、友達の考えから自分の考えを再構成したりすることができるような課題設定であるといえます。

これらの課題設定の要素を取り入れるとともに、新たな課題の要素も明らかにしながら授業実践を重ね、今年度はアクティブ・ラーニングにおける課題設定の在り方を各教科等の特性、単元特性や発達段階を視野に入れて研究を進めていきます。



5 - (2) アクティブ・ラーニングにおける振り返りの在り方

本研究における「振り返り」とは、児童自身がその学習において「何を学んだのか」が実感できる学習活動と押さえます。

例えば、学習した知識をノートにまとめて確認する活動や、自己評価カードを活用して今日の学習における自分の思考や判断を見つめ直す活動も振り返りといえます。算数の学習であれば、学習した知識や技能を活用した適応問題への取り組みも、「何を学んだか」実感できるという意味において振り返りと押さえています。そこで私たちは今までの実践から、アクティブ・ラーニングにおける振り返りに着目しました。

3年生の社会「海ではたらく人たちの様子」では、学習後に「ツイート（つぶやき）」を書く活動を設定し



ました。ツイートには「～が楽しみ。～が知りたい」といった学習に対する期待感や「～がわかった。初めて知った」といった理解の実感、「～なのかな？」疑問などが書かれました。これに対して友達から「リツイート（つぶやきに対する反応）」をもらう。「そうだね」といった同意や共感、「学んだことを何かに生かしたいね」「わかったことを伝えたい」といった提案を示す表現が見られるようになりました。これは、「ツイート」という学習への振り返りを言語化し、さらに友達と共有化を図ることで、学習への意欲や期待感を高め、次の課題や見通しをもつ姿につながっていったととらえることができます。

6年生体育「キャッチバレー」では、学習カードを活用して学習の振り返りを行いました。限られた時間の中で効率的に振り返りができるよう、教師の意図した視点に基づきチェックする欄と次の時間のめあてを自由記述で書く欄を設けました。学習を振り返り、次の課題や見通しを見出し、次の学習に生かそうとするだけでなく、1枚の学習カードに継続して記述することで、学習を通して自分の変容も自覚できるようにしました。これにより自己の成長を実感することができたと考えています。



5年生理科「函館の周辺の天気予報をしよう」では単元のまとめ期において、学習の意味や価値を実感することができるよう、学習したことを生かし気象情報をもとに天気を予想する活動に取り組みました。子供たちは雲画像や雨雲レーダー、降水量のアメダスの資料を活用しながら「雲が西から東へ動く」「天気は西から東へ変化していく」という根拠に基づいて天気予報を行うことができました。習得した学習内容を生かした天気予想により、学習成果と学びの価値を実感する姿を見ることができました。

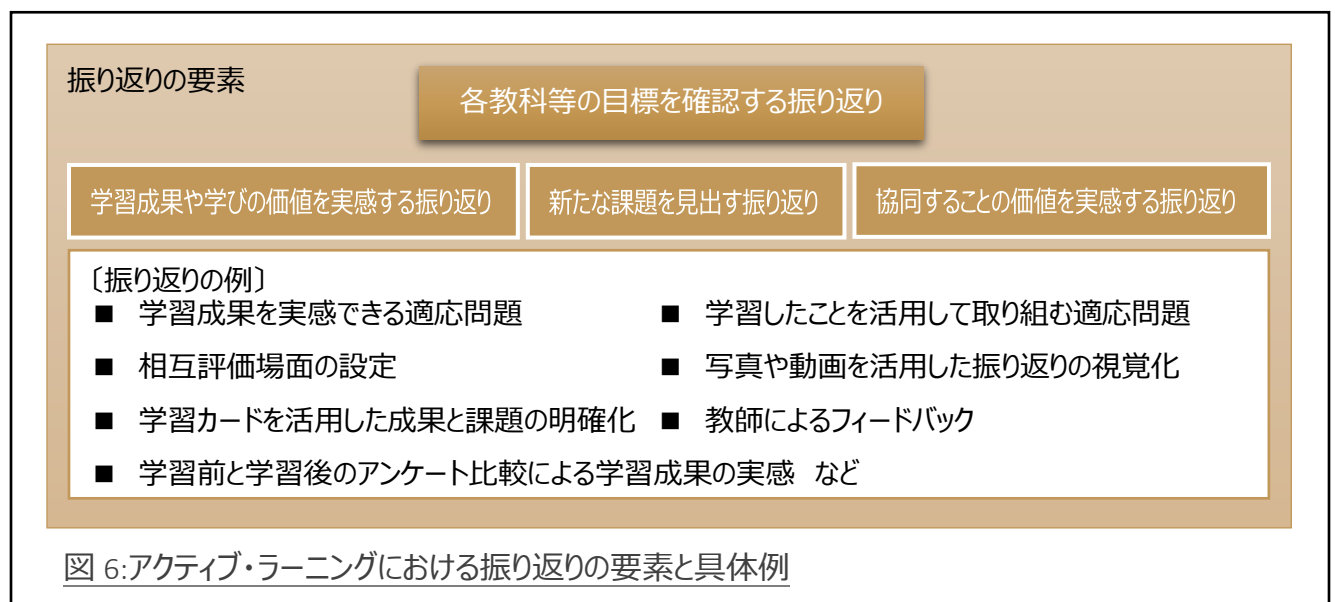
今までの実践から見出した振り返りの工夫を抽出すると、重要な要素として「学習成果や学びの価値を実感する振り返り」「新たな課題を見出す振り返り」「協同することの価値を実感する振り返り」の3点が明らかになってきました。「学習成果や学びの価値を実感する振り返り」とは、「何を学んだか」が自覚化されている状態であるといえます。さらに、学んだことで子供が「わかった」「できた」「ためになった」「学習してよかった」と実感できる振り返りであるといえます。「新たな課題を見出す振り返り」とは学習の結果、新たな疑問や気づき生まれ「次は〇〇したい」「どうしてだろう」といった次の学びの課題意識へつながる振り返りであるといえます。「協同することの価値を実感する振り返り」とは「みんなで考えたから解決できた」「友達の考えで自分の考えが深まった」「自分の考えを友達が認めてくれた」といった、友達と学習するよさや喜びを実感する振り返りといえます。ま

た、友達の学びが自分の学びを成長させるきっかけとなり、自分の学びが友達の学びを成長させるといった互恵性を感じる振り返りだといえます。



このような要素を取り入れた振り返りの積み重ねは、子供の自己有用感を高め、他者との学びの価値を見出し、課題意識を高めながら、自主的・主体的な課題解決と協同的な課題解決に関わる資質・能力を育てていくのです。これらの要素を手がかりに、

各教科等において授業実践を進め、今年度はアクティブ・ラーニングにおける振り返りの在り方を、各教科等の特質や発達段階を視野に入れて研究を進めていくことにしました。



6 おわりに

アクティブ・ラーニングによって育まれていく資質・能力は、21世紀を他者とよりよく生きるために子供たちにとって不可欠なものであると私たちは考えています。そのために、子供が自主的・主体的に、そして協同的に課題解決を図ることができるよう、研究を進めてきました。今年度は初等教育のアクティブ・ラーニングにおける「課題設定」と「振り返り」の在り方を視点として研究を進めています。その点につきましてもご意見をいただき、今後の研究につなげていきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。最後に平成27年度研究構想図を示します。

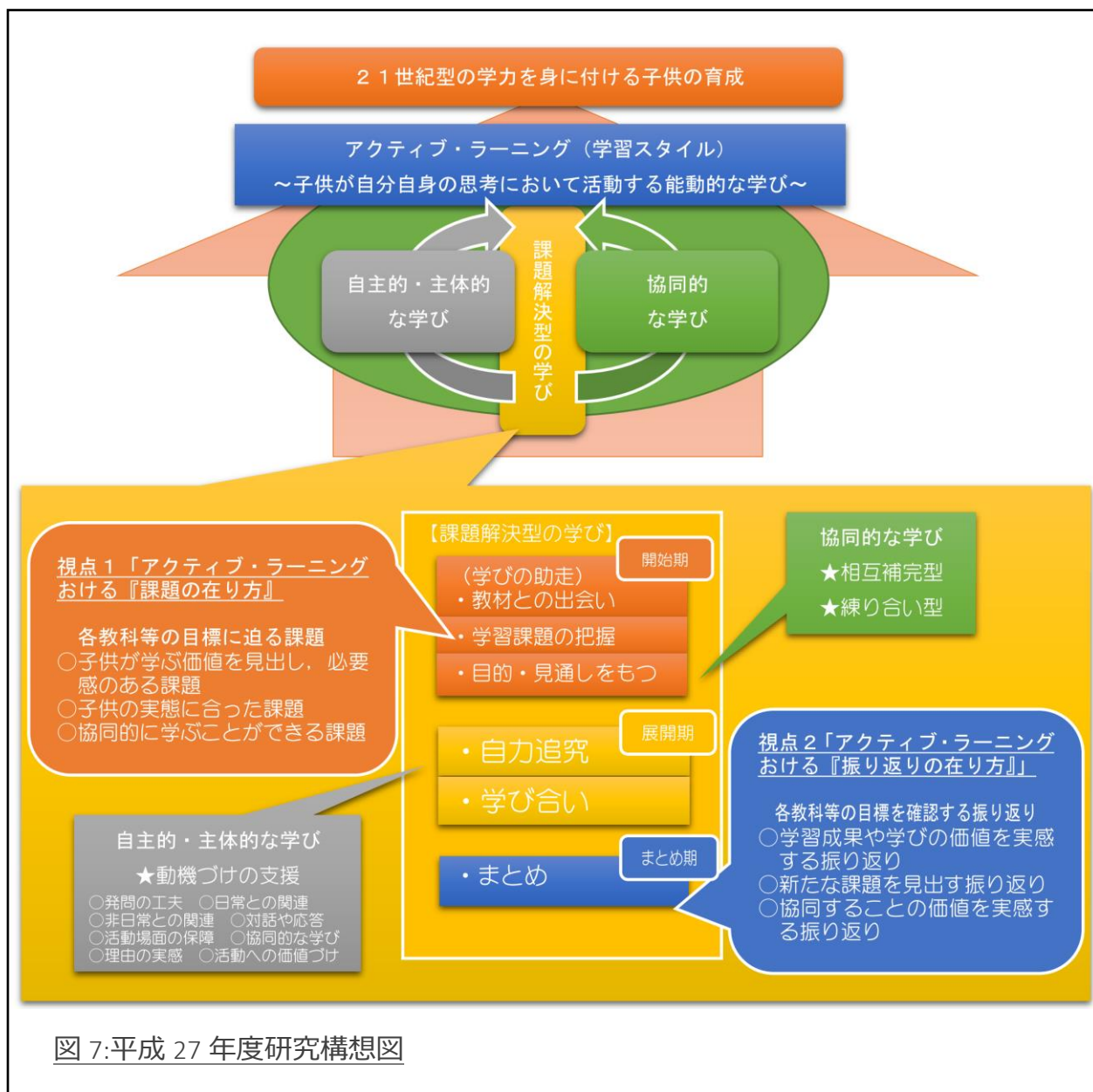


図 7:平成 27 年度研究構想図

《参考文献》

- 国立教育政策研究所（2013）「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5」
- 国立教育政策研究所（2014）「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会― 論点整理 ―」
- 溝上慎一（2014）「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂
- 田村 学（2015）「授業を磨く」東洋出版社
- 杉江 修治（2011）「協同学習入門―基本の理解と 51 の工夫」ナカニシヤ出版
- 石井 英真（2015）「今求められる学力と学びとは」日本標準
- 田中耕治（2011）「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」ぎょうせい
- 文部科学省（2014）「初等教育資料 4 月・9 月号」東洋出版社
- 文部科学省（2011）「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」